

James Joyce Society of Japan, April 2024

# NEWSLETTER



## Topics

1. 第36回研究大会のご案内
2. 第36回研究大会プログラム
3. 研究発表要旨
4. ワークショップ要旨
5. シンポジウム要旨
6. 会場校よりお知らせ
7. 会費のお振込みについて
8. コラム

## 事務局連絡先

〒662-8501

日本ジェイムズ・ジョイス協会事務局

兵庫県西宮市上ヶ原一番町1-155

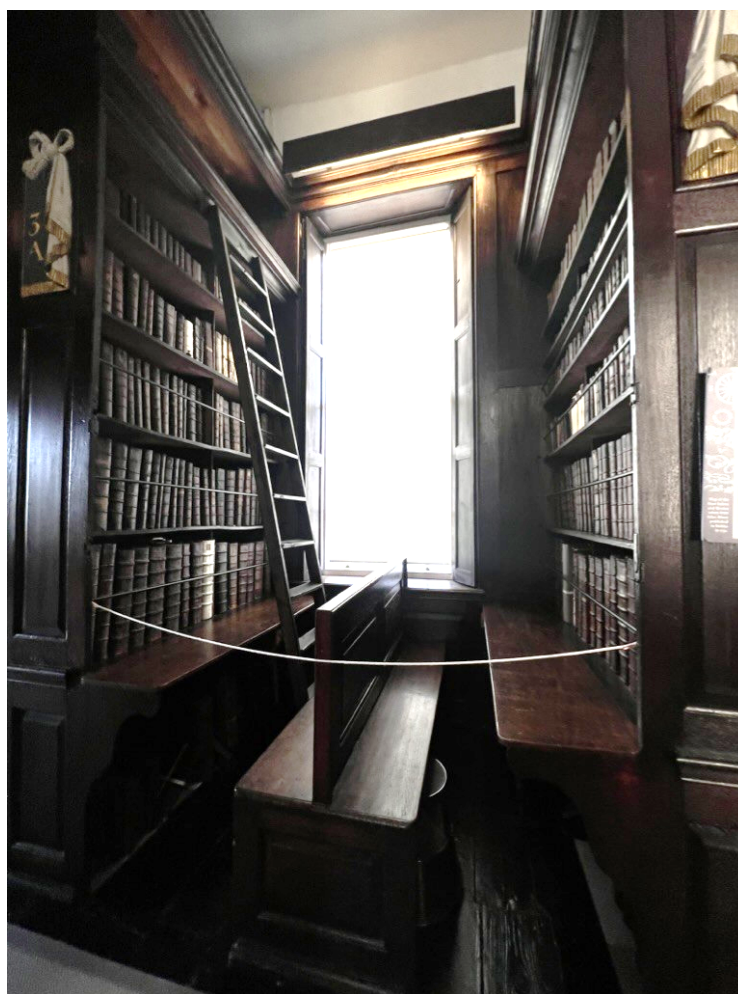
関西学院大学文学部

横内一雄研究室内

連絡先: [joyceanjapan@gmail.com](mailto:joyceanjapan@gmail.com)

協会ホームページ:

<https://www.joyce-society-japan.com>



“Nor in the stagnant bay of Marsh’s library where you read the fading prophecies of Joachim Abbas.” (*Ulysses* 3.107-8)

(写真提供: 南谷奉良)

## 1. 第36回研究大会のご案内

2024 年度の年次大会を来たる 6 月 22 日 (土) と 23 日 (日) に安田女子大学 (広島市) において開催します。地方

大会であることを踏まえ、実験的ですが土曜日の午後から始まり日曜日の午前に終わるというスケジュールを組んでいます。土曜日の夜に宿泊するおつもりでご来場たまわりますれば幸いです。長いコロナ禍の自粛期間を経て、今年は公式の懇親会も行う予定です。ぜひふるってご参加ください。

---

## 2. 第36回研究大会プログラム

---

日時：2024 年 6 月 22 日（土）～23 日（日）

場所：安田女子大学

一日目（6 月 22 日、土曜日）

12:30- 受付

13:00-13:10 開会の辞

会長挨拶 会長 吉川 信

13:10-13:40 研究発表 1

発表者：福山孝子

司会：下楠昌哉

発表題目：忘却の場記憶の場ハウス

13:45-14:15 研究発表 2（招待）

発表者：山田久美子

司会：下楠昌哉

発表題目：勝田孝興とジョイス——松江市勝田孝興関係文書より

14:30-15:00 総会

15:10-17:20 ワークショップ：FW326.21-329.13 を読む——ノルウェー人船長の説得籠絡

福岡真知子（兼司会）、今関裕太、吉川信、田中みんな

18:00- 懇親会

二日目（6 月 23 日、日曜日）

9:30- 受付

10:00-12:10 シンポジウム：ジョイスと平和主義

横内一雄（兼司会）、合田典世、岩下いずみ

12:10- 閉会の辞

---

### 3. 研究発表要旨

---

#### 忘却の場記憶の場ハウス

福山孝子

ジェイムズ・ジョイスは、『ユリシーズ』の終結部において、モリー・ブルームとレオポルド・ブルーム、ふたりの愛の記憶の場に、群像を描き込んだ。この発表では、ハウスの丘という場書き込まれた群像の意味に注目してゆく。

第 18 挿話におけるハウスの描写は、最終稿で大幅に加筆修正された。ブルームに求婚されたモリーが、これまでに出会った様々な人々のことを考える部分が、最も大きな加筆部分である。しかし、ハウスに関して最終稿で加筆されたのは、第 18 挿話だけではない。アイルランド国民の意識に関わる記述が、ハウスという言葉と共に 4 か所で大きく加筆修正されている。1 つ目は、第 12 挿話における市民のベルトにぶら下げられた石に彫り付けられた英雄たちに関する記述、2 つ目は、同じく第 12 挿話の終盤のパロディで、アイルランドの友人リポティ・ヴィラークを見送る灯のともされるダブリンの景勝地に関する記述、3 つ目は、第 16 挿話における観光名所とその歴史に関する記述、最後に第 17 挿話における古文書に関する記述で、いずれもハウスの名前を含む部分が大きく加筆修正されている。ジョイスは最終稿で、ハウスの丘と集団の記憶の結びつきを、さらに強調することにしたと思われる。

ピエール・ノラは、共同体の構成員による「記憶の場」の情報を集め、提示することで、共同体のアイデンティティを見直すことを目指し、大著『記憶の場』を編纂した。ノラは、支配者によって建造される記念碑と対置して、「記憶の場」においては、集団の構成員である個々人の記憶に籠められた意志が優先されなければならないと論じる。構成員の意識の変容と共に、そこには、忘却と変容の危機が必然的に含まれる。しかし忘却や変容は、記憶に情熱を与える契機ともなりうるのである。

本発表では、モリーとブルーム、二人のきわめて個人的な思い出の地であるハウスの丘が、集団の記憶の場になる可能性を考察する。

#### 勝田孝興とジョイス—松江市勝田孝興関係文書より

山田久美子

『フィネガンズ・ウェイク』(1939)は六十二以上の言語から成る言葉で書かれているが、日本語との関連が指摘される箇所が七十以上ある。例えば「雷」が“...kamminarronn...”(FW3.15)と雷鳴の一部となり、クリミア戦争でロシアの将軍を撃ったバックリーの話をするコメディアンのバットは「日本語風言葉」“lipponease longuwedge”(FW339.1)で体をよじり、「サヨナラ、瘤男サン！」“Sehyoh narar, pokehole sann!”(FW339.2)と叫ぶ。ジョイスはどのように日本語の情報を入手したのか。その答えの一つが近年公開された松江市出身の英語英文学者勝田孝興(1886-1976)の遺品にある。勝田は 1925 年から二年間、文部省留学生として欧米に滞在、1926 年 7 月 15 日にパリでジョイスに会った日本人として知られる。勝田の関心は当初演劇にあり、東京帝国大学英文科卒業研究にシェイクスピアの「アントニーとクレオパトラ」を選んでいる。渡欧中に多くの舞台を観た勝田の研究は演劇だけでなく、アイルランド英語やスコットランド英語など口語英語の発音に向かった。『ユリシ

ーズ』(1922) が評判となっていたジョイスに会いに行った勝田は、問われて日本語をいくつか教えた。“Takaoki Katta”というローマ字署名と「天御中主命」「天照大御神」という漢字およびローマ字の読みと英訳が書かれたジョイスのノート Buffalo Notebook VI.B.12.113(a)が残っている。これが *James Joyce Archive (JJA 31.226–322)* (1978) として出版され、熊谷安雄氏が松江市の遺族を訪ねて勝田の自筆ノート「英国近代劇ト其見聞録 Drama VI」を閲覧、その中から“Interview with James Joyce”を翻刻して 2002 年に *Genetic Joyce Studies* に“Takaoki Katta”(VI.B.12:113)”として発表した。2021 年に松江市南田町の旧勝田邸が解体されるにあたり、勝田孝興留学中の資料や蔵書などが松江市に寄贈された。勝田孝興関係文書として公開されることになり、事前予約により閲覧可能となった。本年 1 月に松江市史料調査課を訪ね、上記ノートはじめ勝田孝興関係文書の一部を閲覧した。勝田が帰国後に出版したアイルランド文学関係の著書とあわせて本資料の概要を紹介し、『フィネガンズ・ウェイク』執筆中のジョイスに勝田が影響を及ぼした可能性を探る。

---

#### 4. ワークショップ要旨

---

### *FW326.21–329.13* を読む——ノルウェー人船長の説得籠絡 (Embedment of the Norwegian Captain)

福岡眞知子 (司会)、今関裕太、吉川信、田中みんね

*Finnegans Wake* (1939) の中でも読解の最難所の一つと言われる Book II, Chapter 3 のそのまた最難所に、提案者とワークショップ参加者の皆さまとで果敢に挑んで読みを深めようという企画です。

この章は、HCE のパブでの出来事ややり取りや喧噪をベースに、HCE またの名 Norwegian Captain (sailor) と、仕立屋 Kersse (Kersse the Tailor) か船舶管理人 (Ship's Husband) の娘またの名 ALP との出会いと結婚に、ラジオやテレビのドラマや天気予報などを織り交ぜて展開しています。その中で、Norwegian Captain は仕立屋に服を注文し、うまく仕立てあがらず航海にまた出て、3 度目にダブリンに戻ってきたところで、しぶる娘の父親の仕立屋ともども、Ship's Husband の仲裁・説得にととうとう籠絡されます。

今回のワークショップで、語り手が伝える Ship's Husband の発話をたどり、北欧出身の船長が、説得を受けて籠絡されるようすの含蓄の諸相を、参加者の皆さまとの協働で、もつれっぱなしの網にせず 326.21–329.13 をほぐして楽しむことにいたしましょう。

まずは、*A Skeleton Key* (1944) や *Annotations* (2016) などを頼りに簡単にテキストを把握し (福岡)、提案者三人、新進気鋭の研究者の今関裕太氏、本会会長の吉川信氏、そしてロマン派学会の田中みんね氏から読みの提案をいただき、次に、皆さまに多様な解きほぐしにご参加いただきます。(進行・Introduction 役 福岡眞知子)

#### I

*Finnegans Wake* の 326.21–329.13 の大部分は、「ノルウェー人船長の物語」の主要登場人物の一人である船舶管理人の発言および、それを提示する匿名の語り手の言葉によって構成されている。本発表では、まず船舶管理人の性格や発話のコンテクストを整理しつつ、主に 326.21–329.13 の読解に基づいてこの人物の語り口の特徴 (語彙・修辞・口調など) を分析する。続いて、他の二人の主要登場人物、すなわちノルウェー人船長とダブリンの仕立屋についても、326.21–329.13 の周辺箇所読解に基づいて同様の分析を行う。そのうえで、それぞれの分析結果を総合し、三者のあいだで行われるコミュニケーションの背景と様態を明らかにすることを試みる。結果

として見えてくるのは、これら三人の男性登場人物が互いに対して行う様々な言語行為——脅迫・非難・要求・説得・譲歩・追従・忖度・調停など——がほとんど常に仕立屋の娘に関係し、彼女の今後の人生を左右しうるものであるにも拘らず、仕立屋の娘が彼らのコミュニケーションに介入する機会は物語を通してほとんど奪われているという事態である。その背後には、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけての 아일랜드 およびその周辺地域における女性の社会的抑圧という状況だけでなく、ドゥルーズとガタリが「指令語」と呼んだ、「信じるために作られてさえないのであり、従うため、従わせるために作られている」ような言葉の編成を見てとることが可能だろう（『千のプラトー』、宇野邦一ほか＝訳、河出書房新社、1994 年、97 頁）。加えて、20 世紀の前半から中盤にかけて指令語はしばしば異種混淆的で匿名的な言語——とりわけマスメディアの言語——と共犯関係を取り結んできたというドゥルーズとガタリの指摘を考慮するならば、直接話法に加えて自由間接話法を頻繁に用いながら三人の登場人物の言表を仕立屋の娘の周囲に巧みに配置していく匿名の語り手の権力性とその歴史的立場が浮かび上がってくるだろう。（今関裕太）

## II

ジョイスはある書簡のなかで、「ノルウェー人船長の物語」を「カースとマキャンの話」とも呼んでいる。——「わたしのクレイジーな物語(my crazy tale)から、カースとマキャンの話(the Kersse-McCann story)を読んでもらえたらとも思います。わたしの父たちが話していた素晴らしい物語で、もしあの世で彼らが『トランジション』に掲載されたものを読んだら、父はつぎのように言ったに違いありません、『やれやれ、あいつは俺みたいに上手い話し方ができないんだよ、まったく！』(To Alfred Bergan, 25 May 1937, *Letters* III, 399)。

ジョイスがここで父とマキャンに言及した理由はエルマンが説明してくれている。縁戚のフィリップ・マキャンとエレン・マキャン夫妻は 1882 年 2 月 5 日、ジョイスの洗礼に際して代父母(sponsors = godfather and godmother)を務めた。このフィリップ・マキャンは、ジョン・ジョイスにノルウェー人船長の話をしたことがあった——せむしのノルウェー人船長が、アッパー・サックヴィル通り三十四番地の J・H・カースという仕立て屋に洋服を注文した。船長はできあがった洋服が合わなかったので、お前は服の縫えないやつだ、と仕立て屋を罵倒した。怒った仕立て屋は、あんたはからだを服に合わせられない奴だ、と言り返した——差別的なうえに取り立てて面白い話でもなさそうだが、これをジョン・ジョイスが語ると見事な笑劇になったらしい。「土地の人間とよそ者の間のユーモラスだが苦い応酬から成る話の一つで、この話は『フィネガンズ・ウェイク』に取り入れられた」(Ellmann 23-24、宮田訳 25-26)。

ジョイスの言っている『トランジション』は 1937 年 2 月に発行された第 26 号のことで、この物語 (FW II-3 の一部) は pp. 35-52 に掲載されている。父ほどに上手い話し方ができなかつたと反省しているようにも見えるこの物語には、マキャンやカースのみならず、語り手ジョン・ジョイスの姿も伺うことができるかもしれない。『トランジション』との異動も含めた制作過程および背景を探ることで、できるだけわかりやすいナラティブを抽出してみたい。(吉川信)

## III

*Finnegans Wake* では、HCE、ALP とその 3 人の子供たち、双子の息子と一人の娘、の物語が、聖書を初め様々な文学テキストの引用や、韻律などの言葉遊びで、過剰なまでに豊穡な文体で綴られる。Book II Chapter 3 では、Norwegian Captain と仕立て屋の娘の話に重ねて HCE と ALP の馴れ初めが語られる。数え歌やアルファベットのような、nursery rhyme 的なリズムや、酒の栓を抜くような物音が響き、パブの喧騒が伝わってくる。また、結婚に至る以前には、船長は 2 度までも支払いを逃れて国外に逃亡し、その行状を彷徨えるオランダ人と揶揄されている。

さて、『彷徨えるオランダ人』は、ヨーロッパの伝説を 1843 年にリヒャルト・ワーグナーがオペラ化した作品で、音楽好きのジョイスはその影響を大きく受けている。同様に *FW* に色濃く反映されているワーグナー作品が『トリスタンとイゾルデ』（初演 1865 年）で、その有名なアリアの冒頭が直接引用されている（018.01）。ただし、この伝説については、ジョイスはワーグナーの引用に留まらず、ワーグナーの描くマーク王とアイルランドのイゾルデの物語だけでなく、もう一人のブリタニーのイゾルデも、若いイゾルデとして娘に投影し、物語に幅を持たせている。さらに、彷徨えるオランダ船のモチーフは、イギリスロマン派の嚆矢と目されるワーズワースとコールリッジによる共作『抒情的民謡集』の冒頭を飾るコールリッジの長詩『老水夫行』でも扱われており、ジョイスも明らかにこの詩を意識している。

また、今回扱う箇所にはトマス・ムーアの *Irish Melodies* をはじめ、多くの歌が引用されていたり、詩的な言い回しがされていたりして、ロマン派が強く意識されている。例えば、仕立て屋がダブリンを股にかけて泳ぐエピソード（326.33-35）は、水泳好きだったバイロンが欧亜間のヘレスポント海峡を泳いで渡った伝説的偉業を彷彿とさせる。アイルランドを離れてヨーロッパ大陸で文筆業に従事するジョイスにとって、およそ 1 世紀前に、スキャンダルでイギリス社交界を追われ、ヨーロッパで詩作を行ったバイロンは、格別のシンパシーを覚える先人だったに違いない。本発表においては、特にロマン派に重点を置きつつ、ジョイスの豊かな文体を構成するパスティーシュを読みほぐしたい。（田中みんなね）

---

## 5. シンポジウム要旨

---

### ジョイスと平和主義

横内一雄（兼司会）、合田典世、岩下いずみ

ジョイスという作家は、さまざまなテーマと掛け合わせることで、その力量を改めて見せてくれる作家である。今回のシンポジウムでは、協会始まって初めての広島大会というめぐり合わせ、それから出口の見えない紛争が続く国際情勢を受け、今あらためて「ジョイスと平和主義」というテーマについて考えてみようと思った。手前味噌で恐縮だが、私は昨年発表したジョイス論で、たまたまジョイスの平和主義に言及していた。ただ、その際、平和主義について特段の勉強をしたわけではない。なんとなくジョイスは平和主義者だという思い込みがあったのだが、それは私のみならず一般に共有されている了解ではないだろうか。ジョイスが平和主義者だと言うとき、それは何を意味しているのか。また、彼は本当に平和主義者なのか。こういったことについて、単にきれいごとをなぞって済ませるのでなく、一度きちんと学的手続きを経て理解しておくのも意義あることだろうと思ったのだ。そこでジョイスについて柔軟な考察をしてくれそうな講師を誘い、複数の視点からこの問題にアプローチしてみようと思い立ったのが、本シンポジウムの成り立ちである。

まず、横内が平和主義思想およびジョイスの立場について基礎事項を整理し、『ユリシーズ』論に照準を合わせた二人の講師につなぐ。合田氏は『ユリシーズ』の中でも特にスティーヴンの歴史理解を手がかりとして、そこに平和への希求のモチーフを読み取る。続いて岩下氏はブルームの博愛主義的な言動にメスを入れ、そこに潜む共同体の記憶という次元を剔抉する。最後に横内が『フィネガンズ・ウェイク』に描かれたクリミア危機の顛末を読み直し、ジョイスの予見的洞察に想いを致す。とはいえ、われわれ三人の視点は限られたものだし、またびったりと焦点を結ぶものでもない。そこにどのような問題が潜んでいるのか、また欠落しているのか、フロアからの指摘を得ることで議論を深めたい。

君たちはどう読む／生きるか  
——『ユリシーズ』における「重ね合わせ」  
合田典世

本発表では、『ユリシーズ』における「重ね合わせ」の書法を検討し、そこにジョイスの「平和」への応答の形を探ってみたい。ダブリンの「現実」に古代ギリシアの「神話」を重ねているという「今さら」な事実をはじめとして、「過去の蓄積」（17 挿話）との重ね合わせには、平和主義という観点に立ったとき、いわゆるモダニズム的手法——混沌に秩序を与えるという「神話的手法」（T・S・エリオット）に代表されるような——を超える意義を見出せるように思われる。そこで本議論が強調したいのは、重ね合わせが不完全に終わる、つまり完全に重なりきらないことの重要性である。『ユリシーズ』が『オデュッセイア』の完全コピーではありえないように、ミクロレベルからマクロレベルに至るまで、本作品は“*history repeating itself with a difference*” (16.1525-26) を体現する。こうした重ね合わせにおける不完全、期待はずれ（ジョイスの十八番）を、過去の完全再現、反復にならない「現実」の唯一性の肯定、そして生成しつつある「未来」への期待と見てみたい。具体的には、平和主義という文脈では、おそらくブルームほど取り上げられないであろうスティーヴンに焦点をあて、第 2 挿話での古代ローマ時代の戦争についての授業シーン、第 7 挿話の新聞社で名スピーチを披露し合う場面などについて、ブレイク的幻視やミルトンの詩が喚起する“*ghoststory*” (2.55)、宇宙の記録庫「アカシック・レコード」（7 挿話）の概念に注目しながら検討する。第一次世界大戦を経たジョイスが『ユリシーズ』で提示する「ホーム」（＝平和）とは、『オデュッセイア』で提示されるトロイア戦争後のそれといかに異なるのか。ジョイスのテキストを「どう読むか」が、現実を「どう生きるか」と地続きにあることを示しつつ、一定の見解を導き出してみたい。

ブルームと博愛——共同体の記憶をめぐって  
岩下いずみ

ブルームは動物や身体障害者に優しさを見せ、暴力を否定し、博愛主義であるとされる。本発表ではこうした解釈に一石を投じる形で、ブルームに体現される『ユリシーズ』の博愛について分析したい。その目的のため彼の出自や生い立ちに関係する記憶の継承・想起・忘却からまず考察する。第十五・第十七挿話では「記憶術」・「忘却」に関する言及、祖父の代から関わりがある「写真」について着眼する。記憶を想起させる写真がブルームの家系にまつわるモチーフとして登場するが、同時に彼の意識下では共同体（この場合はユダヤ）の記憶からの逃避・忘却を望んでいることも読み取れ、写真によって個人の記憶との向き合い方が表現されている。十六挿話では「個人的」記憶が集積され「集合的」記憶、すなわち国家単位の記憶、そして歴史の形成がなされる一端が描かれる。そこには集合に含まれる個人の記憶の危うさも織り込まれ、共同体である国家はその国民の記憶を共有するものの、歴史改ざんの危険性も存在する。人々は記憶の継承と忘却のはざままで生きており、平和と結びつく博愛を実現するには記憶を継承すべきか否かという課題も描かれている。

弱者に寄り添うブルームの博愛には、苦境にあつて問題解決を急がず他者に共感するネガティブ・ケイパビリティの様相が強く感じられる。共同体の記憶を継承しながら個人が生きることは他者の痛みも負うことを意味し、移民の出自を持ちアイルランドで生きるブルームは多層的な共同体の記憶に関わっている。この意味で、ブルームは自分と同じく不確実性の中にある他者に共感する、博愛にとどまらない平和主義を体現している。これらの

観点から、直接体験していない共同体の記憶や歴史に人類がどう向き合い、博愛や平和を目指すのかという問いへの解答を探り、共同体の記憶と博愛の関わりから『ユリシーズ』におけるブルームの博愛を再考したい。

## ジョイスのクリミア危機

横内一雄

『フィネガンズ・ウェイク』は酒瓶が死者を襲撃するバラッド「フィネガンの通夜」の無数の変奏からなる作品で、中でも両極の対立から衝突、そして和解へ至るプロセスが、まるでその夢にうなされるように、無数に反復・変奏されていく。そのモチーフは HCE とキヤド、またシェムとショーンの対立と和解へと収斂していくが、逆に言えばそのテーマが無数のモチーフに拡散しているとも言え、その過程で古今の無数の戦争が参照される。まるでジョイスは大戦間期を通じて、戦争が終結して平和に至るシナリオに取り憑かれていたかのように。なかでもジョイスが特に力を入れて書いたのが、クリミア半島を舞台とする戦争の一局面、セヴァストポリ攻囲戦であった。浅井学著『ジョイスのからくり細工』でも詳細に分析されたこのエピソードを今あらためて再読し、今だからこそ差し迫って聴き取られるジョイスの不安と祈りに耳を傾けたい。

---

## 6. 会場校よりお知らせ

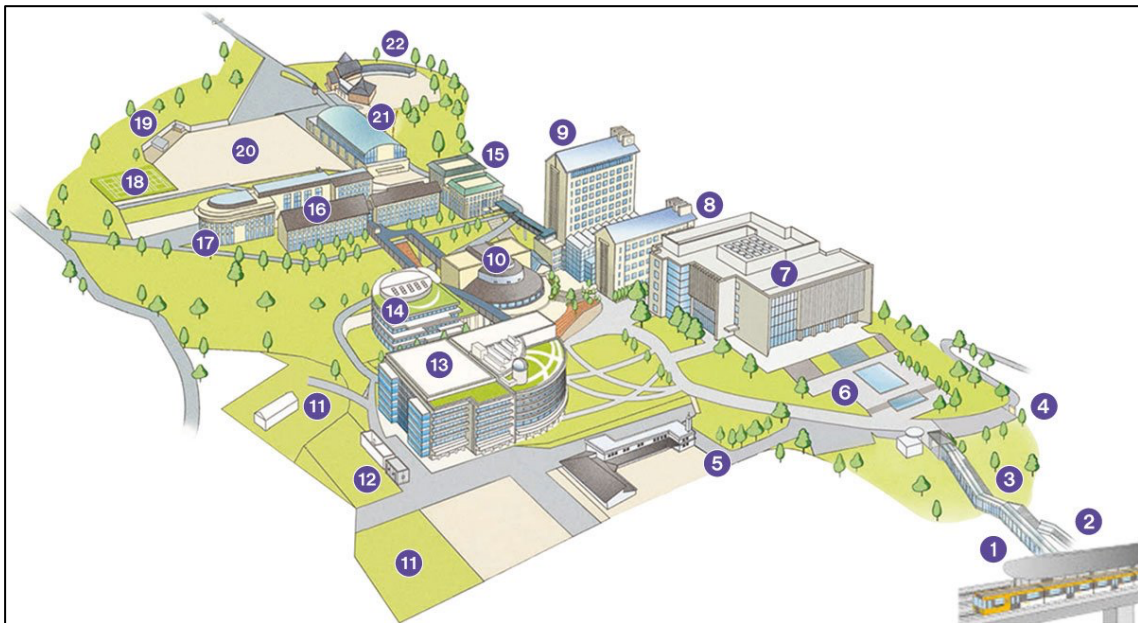
---

会場校となる安田女子大学へのアクセスはこちら (<https://www.yasuda-u.ac.jp/outline/access/>) をご覧ください。会場校の最寄り駅は、アストラムライン安東駅です。広島市内中心部からは、アストラムライン（広域公園前行き）に、本通駅もしくは県庁前駅で乗車し、安東駅で下車。

JR 広島駅からは、①可部線（あき亀山・緑井行き）で、JR 新白島駅か JR 大町駅でアストラムライン（広域公園前行き）に乗り換え、安東駅で下車。あるいは、②山陽本線（岩国・大野浦行き）で、JR 新白島駅でアストラムライン（広域公園前行き）に乗り換え、安東駅で下車（山陽本線は JR 大町駅を通りませんので、必ず JR 新白島駅で乗り換えてください）。

安東駅で下車したら、北出口から出て右手にまっすぐ進み、横断歩道を渡ると、写真のように校舎が見えてきます。屋根付きの専用通学路（矢印の方向）に進んでください。最初は階段ですが、途中からエスカレーターになります。会場は 5 号館（学内地図の 14 番の建物）の 2 階です。





会場校の近隣に宿泊施設はありません。JR 広島駅周辺か、アストラムライン本通駅周辺のホテルをご利用ください。

また、会場校の近隣に分かりやすい食事処はあまりありません。会期中、食堂は営業していません。なお、6月22日(土)は、コンビニ(学内地図の7番の建物の1階)は営業予定ですが、かなり小さい店舗なので十分な品ぞろえとはならない可能性があります。

## 懇親会のご案内

第 36 回研究大会の懇親会を、以下の通り開催いたします。ご出席される場合は、以下のリンク（Google フォーム）から、6 月 11 日（火）までにお申し込みください。多くの皆様のご参加をお待ちしております。

### 第 36 回研究大会 懇親会

日時：2024 年 6 月 22 日（土）18：00～20：00

場所：安田女子大学 学生食堂まほろば（学内地図の 10 番の建物 1 階）

会費：4,500 円（会費は当日受付にてお支払いください）

参加申込フォーム：<https://forms.gle/fXqPfubnRqFuna4a7>

---

## 7. 会費のお振込みについて

---

会費は協会の口座へのお振込みをお願い致します（大会会場での支払いはできません。尚、既にお振込みを済ませていらっしゃる方で、領収書が必要な方は受付でその旨をお知らせ下さい。その場で発行致します。）。

振込用紙をご利用の場合は、郵便局や金融機関に備え付けの用紙をお使い下さい。恐れ入りますが、お振り込みの手数料は会員の皆様にご負担頂いております。ゆうちょ以外の銀行からのお振込みの場合、振込先が異なりますのでご注意ください。

一般会員・・・5000 円 学生会員・・・3500 円

### 1. ゆうちょ銀行からのお振込みの場合

名義 日本ジェイムズ・ジョイス協会  
口座番号（記号）10430  
番号 1854541

### 2. ゆうちょ以外の銀行からのお振込みの場合

名義 日本ジェイムズ・ジョイス協会  
銀行名：ゆうちょ銀行  
金融機関コード：9900 店番号：048  
預金種目：普通  
店名：〇四八店（ゼロヨンハチ店）  
口座番号：0185454

## 8. コラム

岡倉由三郎宛て Sylvia Beach の返信——*Ulysses* の翻訳権

東郷登志子

Joyce の詩 “A Portrait of the Artist as an Ancient Mariner”<sup>1</sup> は、S. T. Coleridge の *The Rime of the Ancient Mariner* (1798) をもじった風刺詩である。*Ulysses* 出版後、日米で海賊版が出たことを揶揄し、第一スタンザで皮肉に詠い始める<sup>2</sup>。

第二スタンザでは、海賊船の舳先に“K. O. 11”と記されていたと詠う。注によると出版 11 年後、11 ラウンドのノック・アウトを意味するとある。詩語は多義性を孕むので人名の頭文字とローマ数字の II と読めば“Kakuzo Okakura II”とも解せる。

岡倉覚三の二代目ではないが弟の英語学者岡倉由三郎が Sylvia Beach と書簡を交わしていた事実が判明した。1932 年 7 月 4 日付 Beach が由三郎に宛てた返信で確認された<sup>3</sup>。

由三郎は、平田氏によると 1931 年 10 月から日本政府代表の美術使節として北米で開催された日本画展に派遣され、翌年 1932 年 1 月半ばから英国に渡り、3 月末に帰国したという (14-17)<sup>4</sup>。同氏によれば英国行きは本来の任務ではなかったが、当初から予定していたらしく、言語学者 C.K. Ogden と議論し、彼が考案した BASIC English (British, American, Scientific, International, Commercial English) を日本に導入する意図があったという。

Beach の返信で判明した事実は、由三郎が英国からパリに寄り Shakespeare and Company を訪ね、その折、彼女が留守であったことだ。彼女を訪ねた理由は不明だが、返信内容は、帰国後の由三郎が *Ulysses* の翻訳権について記した書簡に対する回答であった。彼女によると、日本が調印したベルヌ条約では 10 年間、翻訳権を保護する規則はあるが、それはイギリスで出版された書物に適用され *Ulysses* を出版しなかったイギリスには著作権がないこと。同書は日本同様、条約加盟国であるフランスで出版されたのでフランスの法律で保護されること。また、ベルヌ条約第 5 条により状況が変化し、作者が訴訟を起こさず、作者の損害が補償されるよう、双方の編集者が交渉できる可能性はあるという趣旨であった。返信の後半では、フランスでは日本語訳は高くつくので批評を送ってくれたら Joyce は感謝するだろうし、そこを赤鉛筆でマークしてくれるように頼むだろうとも記していた。

アイルランド国立図書館所蔵の書簡は、原文を複製したタイプ原稿なので<sup>5</sup> 日付間違い、部分的変更、削除箇所がある。“Dear Mr. Okakura”が、“Dear Sir”と変更されたのはともかく、由三郎が日本から持参した手土産について、彼女が記した段落は削除されている。Beach が、喜んで身に付けたいと記していた手土産は彼女の言う「スカーフ」ではなく、数枚の「風呂敷」であった可能性もある。

削除された箇所が重要なのは、由三郎が 5 か月余りの外遊中、その手土産を離さず、パリに立ち寄る際に持参したという事実に、英・米で大和心や茶の湯について出版し影響し合った「岡倉兄弟」と *Ulysses* との関連が透いて見えるからである。

詩の第三スタンザに“Shakespeare and Company”を皮肉った “Shakefears & Coy” が登場し、第六スタンザに “the silviest Beach of Beaches” も出現する。

天心記念五浦美術館蔵の書簡の原文を読むと、Joyce のこの詩に、由三郎と交わした Beach の書簡内容が関連していると思われる。創作の日付が、書簡の日付 1932 年 7 月に近い、同年 10 月であるのもそれを物語る。しかも、海賊版出版は 1931 年で<sup>6</sup>、出版後 9 年目である。11 年目なら “K. O. XI” ではないだろうか。

註

- <sup>1</sup> James Joyce, *Poems and Exiles*. Edited with an introduction and notes by J. C. C. Mays (London: Penguin, 1992) 93-4, 322-23.
- <sup>2</sup> Richard Ellmann, 宮田恭子訳『ジェイムズ・ジョイス伝』2 (東京: みすず書房, 1996) 799-800.
- <sup>3</sup> 「Shakespeare and Company 書簡・岡倉由三郎宛て」茨城県天心記念五浦美術館 (1932. 7. 4) . 現地で実見.
- <sup>4</sup> 平田諭治「岡倉由三郎の『国際語としての英語』をめぐる思想と行動——1930 年代初めのベーシック・イングリッシュの受容を中心に」筑波大学『教育学研究』第 83 巻 第 3 号 (2016) 14-26.
- <sup>5</sup> *Letter: From [James Joyce/Sylvia Beach] to Professor Y. Okakura, Naka-Arai, Outside Tokyo*. 1932? May. Léon Papers, 1930-40, National Library of Ireland Catalogue.  
<https://catalogue.nli.ie/Collection/vtls000356640>
- <sup>6</sup> 川口喬一『昭和初年の「ユリシーズ」』(東京: みすず書房, 2005) 166-65.